大阪発達総合療育センターへのご理解・ご協力、誠にありがとうございます。

感謝

一般寄付金

平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 1 月末日

寄付者（敬称略）	
廣田 和子	家族会（ｸﾘｽﾏｽ会費用）
児玉 和夫	鎌田 泰昌
山下 智加	出野 彩佳（貯金箱）
内田 瞳	南田辺民生・児童委員会
国際ソロプチミスト大阪 - 中央	廣野 惇朗
㈱白光　代表取締役　吉村 加代子	亀井 光子
西野　修一	田辺地区民生委員児童委員会
匿名 2 名	泉佐野市立木馬園
井上 恵美子	東住吉区民生委員児童委員会
㈱コジマ　小島常男	ダイセル労働組合本社支部
井上 明生	楽基金 128 件
阿部 由紀子	バザー益金

寄付物品

平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 1 月末日

寄付者（敬称略）	寄付物品
西村 厚紀	時計
熊本県経済農業協同組合連合会	西瓜
日本自由同和連盟	扇風機、お茶、石鹸等
古谷 義信	バスタオル類
北村 春美	バスタオル
株式会社フェニックス	ボディーソープ、リンスインシャンプー
大阪菓業青年クラブ	各種菓子
財団法人　日本出版クラブ	児童図書一式
大阪府生命保険協会	テレビ 1 台
ホワイティーうめだ商店会	テレビ、デジタルビデオカメラ、DVD プレーヤー他
バイオニア労働組合　営業支店	DVD
鈴木義肢装具　株式会社	てぬぐい
学校図書館によい本いっぱい運動推進連盟	児童図書一式
匿名	みかん
児玉 和夫	ボッチャー式
川村義肢株式会社	ハンドタオル一式
鎌田 美香	車椅子

当センターの役割をご理解頂ける皆様のお陰で、円満な運営を保つことができます。
今後とも、何卒、よろしくお願い申し上げます。

当センター被表彰者の紹介

平成 23 年度　センター被表彰者

永年勤続表彰　20 年	黒澤 淳二
	河中 真由美
永年勤続表彰　10 年	牛尾 実有紀
	中村 恵子
清水賞	松本 茂樹 「家庭療育と 24 時間コンセプト　大阪発達総合療育センターでの実践」
	市川 雅子 「障害児の採血に局所麻酔剤を使用した痛み緩和への取り組み」
	榎勢 道彦 「重症心身障害児 (者) の生活機能とその障害」

ピックアップ －PICK UP－

救急医療功労者厚生労働大臣表彰受賞

船戸正久フェニックス園長が新生児診療相互援助システム（NMCS）を代表して救急医療功労者厚生労働大臣表彰を受けました。

第 40 回大阪府医療功労賞受賞

『第 40 回大阪府医療功労賞』をリハ部　彦田龍兵部長が受賞しました。
（平成 24 年 1 月 31 日）

平成 23 年度　外部団体からの被表彰者

救急医療功労者　厚生大臣表彰	船戸 正久
大阪府医療厚労賞	彦田 龍兵
全国社会福祉協議会会長　永年勤続表彰	皆川 かほり
大阪府社会福祉事業従事者　知事表彰	寺澤 年代
大阪府社会福祉大会　永年勤続表彰	北村 俊枝
	大西 慶子
	小出 裕美
大阪府病院協会　病院職員永年勤続表彰	黒澤 淳二
	河中 真由美
大阪市社会福祉施設等従事者永年勤続表彰 大阪市長感謝状	杉浦 みき
	皆川 かほり
	鶴田 ゆかり
	粂 玲子
	米花 佳代子
	田中 康夫
	今村 健一
	福岡 延江
	小出 裕美
	門田 多恵子
	髙田 弘子
	川合 尚子

大阪発達総合療育センター
〒546-0035　大阪市東住吉区山坂 5-11-21
TEL　06-6699-8731
FAX　06-6699-8134
URL　http://osaka-drc.jp

発行者：社会福祉法人　愛徳福祉会
発行責任者：梶浦　一郎

社会福祉法人　愛徳福祉会

大阪発達総合療育センター

Osaka Developmental Rehabilitation Center

☆平成 24 年 4 月から保険医療機関「南大阪療育園」が、「南大阪小児リハビリテーション病院」へ名称変更致します。
※ただし、福祉施設としての名称である「南大阪療育園」は現状のまま残ります。

肢体不自由児施設　南大阪療育園
重症心身障害児者施設　フェニックス
肢体不自由児通園施設　あさしお園
難聴幼児通園施設　ゆうなぎ園
訪問看護ステーション　めぐみ

葦

大阪発達総合療育センター機関誌

年頭所感

社会福祉法人　愛徳福祉会　理事長
梶浦　一郎

新年あけましておめでとうございます。本年も皆様とこうしてお正月を迎えることができて、本当に有難い事だと思います。これも、昨年の皆様の努力と天災がこなかった幸運のおかげと感謝いたします。昨年は何と云いましても 3.11 の東北の大震災、それに伴う大津波、原発事故が最大の不幸な出来事だったと思います。明治の学者、寺田寅彦が「天災は忘れた頃に来る」と云いましたが、最近は「天災は忘れないうちに来る」と言い換えた方が良いようです。阪神淡路大震災の記憶が消えないうちに、東北の震災。これも一昨年のスマトラ沖地震による大津波で列車が椰子林の中に押し流されているＴＶと重なって思い出されました。9 月 22 日には和歌山の崖崩れ、10 月にはタイの大洪水と何もないのが不思議な位です。私たちの立場ではいつ何時大事故が起こっても想定外と云って、責任逃れをするわけにはいきません。すぐに答えは出ませんが、常々から自分たちの足元を固めて何が起こっても慌てることの無いよう心がけましょう。

明るいニュースとしては何と云っても 7 月のなでしこジャパン優勝のニュースです。先に得点されても 2 度も追いつき、最後のＰＫ戦では相手が戦意喪失している様子がありありと見え、見事な圧勝でした。日本女性の強さ、したたかさに日本中が沸きかえりました。一昨年変な女性大臣が「世界で 2 番で良いのではないか」と云ったのを見事に打ち破り、痛快だったのは私だけではなかったと思います。どうも男子は分が無さそうでしたが、その中で一番輝いていたのは橋本徹新市長だったと思います。私たちにとって良くなるか、悪くなるかはわかりませんが、やっと明確に決断する政治家が出てきたようです。あるべき方向に向かうことを願うばかりです。本当に輝くか、そうでないかはこれからです。

さて、園の中に目を移しますと大きな変革が起こりつつあることはお分かりかと思います。4 月にフェニックス園長の児玉先生が船戸先生に変わり、南大阪療育園から南大阪小児リハビリテーション病院と名を変え、医療色を強めていきます。しかし私たちの法人としては今入園している多くの障害児者、ショートを利用している方々、外来に通っているすべての人々はどのように法律が変わって、制度が変わっても責任を持って今後も終生援助していかなければなりません。その決意をこの場で明言したいと思います。昨年初めに府立母子センターの初代所長だった竹内徹先生を理事にお迎えしたのも、これらの変革の用意です。竹内先生にはかねてから母子センターで生まれた極小未熟児、障害児の成長がどうなっていくのかを非常に関心をもたれ、責任を持ちたいと思われておりました。私たちのこれからの障害児者の一生の医学的援助構想の重要な一員となって頂いたのでした。最初の手始めとして 2 年前にはじめた障害児に特化した訪問看護ステーションはやっと昨年末で黒字基調になってきました。関係者のご苦労に感謝いたします。

一層医療色を強め、医療技術を向上させると云っても今までのいわゆる小児病院（すべて公立です）を目指すわけではありません。重装備もできませんし広大な場所もありません。しかし、公立ではできない私たち独自の小児病院を考えています。障害児専門病院という方が適切かも知れません。多くの高度な急性期病院（母子センター、市総合など）、地域の診療所などとの有機的な連携をもとにした、footwork の良い地域ぐるみの包括的ケアの中心病院を目指したいと思います。何年かかるか分かりませんが、医療技術をもとにした福祉的活動の拠点を目指すつもりです。勿論健全経営が大切ですが、さわやかな明るい、風通しの良い組織にしたいと思います。皆様のご助言、ご協力を切にお願いします。

平成 24 年 1 月 4 日
梶浦　一郎

就任の挨拶

重症心身障害児者施設フェニックス園長
船戸　正久

昭和 49 年に奈良県立医科大学を卒業後、研修医として淀川キリスト教病院へ就職し、1 年間内科・外科・産婦人科・小児科などのローテイトを経験しました。その後当時の竹内徹小児科部長（元大阪府立母子保健医療センター院長）の下で新生児医療を中心とした小児医療に取組んできました。平成 23 年 3 月に 37 年間勤務しました淀川キリスト教病院を退職し、4 月から児玉和夫先生の後任で大阪発達総合療育センター「フェニックス」園長として就任しました。それまで周産期母子センター長として新生児神経学、発達神経学などを中心に臨床に携わり、後半は重症児の小児在宅医療や臨床倫理の問題にも取組んできました。当センターに移ってからも後方支援として「NICU（新生児集中治療室）から帰れない子供たち」の研究テーマが続いています。

第一線の急性期病院から当センターの重症心身障害児者施設に移動してまず驚いたのは、医療と福祉の場である療育施設では「発達支援・発達保障」というキーワードで、配置されている比較的多くのリハスタッフ、介護職員、保育士、HPS（Hospital Play Specialist）など職種の多様さでした。そして非常に感銘を受けたのは、重症の障害をもった利用者の方々の「医療支援」だけでなく、「発達支援」・「生活・介護支援」のために医師・看護師・リハスタッフ・介護士・保育士などが専門知識を出し合い、チームワークで包括的カンファレンスをする姿でした。そして季節に応じたフェニックス祭、運動会、遠足、クリスマスなど様々なイベントの多さも、治療中心の病院では決して味わえない楽しい貴重な経験でした。そうした環境の中で重症な障害をもち、何も表現ができないと考えていた利用者の方々が職員を信頼して見せる笑顔の素晴らしさに大変癒されました。こうしたことが第 1 線の病院しか知らなかった者にとっては非常に新鮮な驚きと感動の体験でした。

当センターは、昭和 45 年に肢体不自由児治療施設「聖母整肢園」として最初開設され、創立当初から基本理念として、1）施設収容よりも在宅療養を、2）脳性麻痺に対する積極的な医療、3）脳性麻痺の療育は 0 歳からを挙げて「ボバース概念」を土台に医療活動を続け、昭和 57 年には「南大阪療育園」と改名しました。平成 18 年には大阪市の委託を受けて重症心身障害児者入所施設「フェニックス」を新たに新設し、同時に全体の施設を「大阪発達総合療育センター」と命名しました。とくに在宅支援の柱の一つであるショートステイ（短期入所）は、平成 22 年の登録人数は 538 名、総利用人数：1,036 名 、総利用日数：3,972 日と西日本で最も多い登録人数・利用人数を占めています。もう一つ在宅支援の柱である訪問看護ステーション「めぐみ」は、重症児を中心に設立以来、訪問人数・訪問回数ともに約 5-6 倍に増加しつつあります。当センターの新たな役割として、昨年度から大阪の新生児診療相互援助システム（NMCS）、すなわち新生児医療機関 28 施設と協働して「NICU の後方支援」を行なっています。

平成 23 年度に入って障害者自立支援法等の改正（いわゆる「つなぎ法案」）が成立し、18 歳未満の障害児は、児童福祉法を法的土台に今まで通り「発達支援・発達保障」をキーワード に維持されると同時に、18 歳以上の障害者は、新しい障害者自立支援法を土台に「自立支援・自立保障」をキーワードに新たな支援体制の構築が必要になります。さらに新たな骨格の障害者総合福祉新法では、「地域移行」の法定化が提言され施設入所支援は 10 年後検証を行うことが明言されています（福祉新聞平成 23 年 9 月 5 日）。第一線の病院から昨年初めて療育の世界に飛び込んだ私にとっては、こうした激しい福祉の動きに毎日が驚きと学びの連続です。糸賀一雄先生が「この子らを世の光に」といわれたように、私たちの施設も重症障害を持たれた方々のセイフティ・ネットとして地域の中核支援施設としての役割が果たせるよう願っています。皆様のご支援とご協力宜しくお願いします。

重症心身障害児者施設フェニックス園長　船戸正久

ニュース / トピックス

ご報告

最近の行事

フェニックスクリスマス会

フェニックス秋の運動会

寄付、その他施設運営へのご協力

- 改めまして、ご協力を賜りました関係者の皆様に謹んで感謝の意を表します。-

財団法人 JKA 平成 23 年度　福祉車両の整備補助事業

事業完了日時	平成 23 年 10 月 12 日（納車）
車両名	トヨタハイエース スーパーロング D タイプ 1 台
目的	・通所事業利用者の送迎 ・施設外活動の円滑な実施 ・緊急事態への早期対応
事業費総額	3,860,000 円
助成金	2,250,000 円
自己負担金額	1,610,000 円

平成 23 年度の財団法人日本自転車振興会の補助金を受け、下記の事業を完了致しました。

ここに事業完了のご報告を申し上げますと共に、財団法人日本自転車振興会をはじめ、ご協力を賜りました関係者の皆様に謹んで感謝の意を表します。

ザ・リッツカールトン大阪様　職員の方々来園・ふたば招待

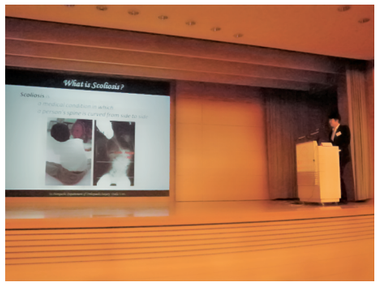
ホワイティうめだ商店会様　ご寄付

プレーリーくん物語

「新しい装具を作ってもらったよ。わっ、座れてる、座れてる～、しゃきっ」

平成 19 年 12 月 13 日付毎日新聞の記事となった、座っているこどものイラスト説明につけられた林 優梨亜さんのお母さんによる投稿文です。側弯が進行して座れなくなっていた娘の優梨亜さんが、新しい装具によって再び座れた時の親の大喜びの様子を素直に表現されていました。

これが麻痺性側弯（脳性麻痺、染色体異常などが原因でおこる側弯変形）の治療のために新しく開発した弾性脊柱装具（Dynamic Spinal Brace）の誕生の瞬間でした。後日職員から募集した愛称の中から「プレーリーくん」と命名し、同時に前記のお母さん林 やよい様が、草原の中ですっくと立っている可愛いいプレーリードックのように背中が真直ぐになるように、との願いをこめてロゴマークも作ってくれました。以降 4 年間プレーリーくんで治療した麻痺性側弯の患者さんは 700 名を超えています。平成 22 年 4 月には阪大の整形外科バイオマテリアル研究所菅本教授との共同研究に付し、科研奨学金を受けました。平成 23 年 5 月 27 日には専売特許が認められました（特許番号　特許第 4747327 号）。この間側弯学会、リハ学会などに計 9 題提出し 4 回の講演会をひらきました。今回はそのうち 2 回の講演会の様子を述べることにします。

まずは、「日本レット協会主催 2011 レットサマーキャンプ IN 大阪」（貝塚市水間 平成 23 年 8 月 19 日）です。梶浦、大川、松井、寺裏と鈴木義肢の 3 名が参加し、講演とプレーリーの試着会を行いました。職員の 4 人はプレーリーのロゴマークのついた T シャツを着て出席し、40 家族 180 名の参加で明るく和気あいあいとした会で、昼食も一緒に御馳走になりました。なかでも試着をした一人が突然椅子から独りで立ちあがり、テーブルまで安定して歩いて行き、スプーンを持ってカレーライスを食べ始め、周囲の人々を驚かせました。体幹の安定性がいかに大切か、そしてプレーリーくんの絶大な効果を見せてくれた楽しいショーでした。レット家族の方々に希望を持てるような会となったと思っています。

次に平成 23 年 11 月 26 日に台湾義肢装具協会の招きで、台北で丸一日講義を行いました。梶浦、森口、松井がそれぞれ一時間ずつ話をしましたが、森口先生は流暢な英語で講義をし、今後の外国での学会発表に自信が持てたと満足そうでした。梶浦は日本の療育の歴史とプレーリーくんの 4 年間の実績を、松井は運動療法とプレーリーくんの協力の意義をそれぞれ話しました。平成 24 年には鈴木義肢が台湾でプレーリーくん製作の実技指導を行う予定で、今後の外国進出への足掛かりになったようです。今年度は地道な臨床成績の分析による治療の適応と限界を決定し、その他の基礎研究を続け外国へ発表する機会を作っていきます。研究所でも大学でもない我々の組織では多くの困難があり、職員のみなさまの負担になることも多いと思いますが、Milwaukee 以来はじめての異なる発想での側弯装具であることに誇りと自信をも持って頑張ってください。